港区立白金小学校

学校だより

９月号

発行人　髙山　直也

令和６年　９月２日

夏の記憶から実りの秋に向けて

校長　髙山直也

酷暑という言葉が躍り、35℃が当たり前になった夏。もはや今後はこれが「異常」ではなく「通常」となる予感のした夏でした。夏は子供たちを成長させる絶好の体験機会ですが、本気の温暖化阻止の取り組みと同時に、気温35℃を前提とした新たな夏の過ごし方を、本気で考えなくてはならないと感じました。

とは言え、今年は様々な「熱い」夏でもありました。まずはパリオリンピック、私は日本女子選手の活躍に目を奪われました。特に体格差で劣るレスリングの闘い方は唸りました。背は低いけれど、下半身の安定とスピードを生かした「低いタックル」は、警戒している相手を翻弄しました。人のもつ「特性」を生かすことで、広がる可能性は無限大なのだと、あらためて痛感しました。

甲子園100周年の今年、守備を中心とした数々の名勝負が生まれました。特に3回戦、島根大社高校対東京早稲田実業の試合は、100年甲子園の神様が仕組んだ、「奇跡の一戦」でした。9回裏大社1－2早実から、延長11回裏タイブレークの末の大社3－2早実で終了するまでの約30分間は、私のスポーツ観戦人生で最も興奮し、感動し、現実視できないほどでした。この間全てが奇跡の連続でしたが、2つだけ紹介させてください。

1つ目、早実9回裏、スクイズで2－2の同点にされなお1アウト2，3塁サヨナラのピンチ。ここで早実の監督は「外野手」守備の交代を指示します。まだこの夏地方大会含め1回も出たことの無い1年生を、何と7人目の「内野手」としてピッチャーの横に守らせます。外野には2人だけ。見たことの無い奇策ですが、次のバッターが打った打球は吸い込まれるようにその1年生へ。確実に捕球し送球1塁アウト、バックホームアウトで3アウトチェンジ…。サヨナラ負けのピンチは、一瞬で流れが変わりました。2つ目、延長タイブレーク11回裏大社の攻撃、ノーアウト1，2塁から始まるこの攻撃、今度は大社の監督が、同じくまだこの夏1回も打席に立ったことが無い2年生を代打で送り出します。そして、三塁線に芸術的なバントを一発で成功させます。自らも生きてノーアウト満塁とし、次打者の勝利のサヨナラ打を演出しました。

この2つに共通していたことは、「まだ1回も試合に出たことの無い」選手を、ひりつく勝敗が決する場面で起用したことでした。そして、2人の「特性」を監督や周りの選手が熟知していたこと、そして本人もそれを理解し伸ばしてきたことでした。早実の1年生、本来は内野手で守備のうまさで図抜けていた選手でしたが、この夏1年生でもあり外野枠で控えに回っていました。大社の2年生、あの場面で監督の「この中で誰かバントを決めてくれる者はいるか。」の問い掛けに、自ら挙手。自分の持ち味、磨きに磨いてきたバントを成功させたのでした。それを信じ任せた監督、選手たちも凄いが、決め切る技術と精神力はもっと凄い。練習の賜物ですね。

その子のもつ「特性」＝持ち味・個性は十人十色です。私たち大人は、他と比べることなく、一人一人の持ち味を引き出し、気付かせ、自ら磨けるよう支えていかねばなりません。白金小は、追究したい課題、解決するプロセスなどを、子供が自分で考える「自由進度学習」を大切にしています。個々の思いや願いを乗せた学習の可能性は無限大に広がります。2学期は運動会や展覧会もあります。共に手を携え、子供のもつ「特性」を存分に発揮できる学期にしていきましょう。

白金小学校　X